

巻頭言

瀬戸内海に日本海の海水を流し込む

玉川大学脳科学研究所 教授
松元 健二



坂上所長の指示により、今号の巻頭言を僭越ながら、紀要取りまとめ担当の私が執筆させて頂くこととなりました。

小5の秋頃だったか、兄の卒業文集を何気なく読んでいたら、校長先生の一文が目にとまりました。「瀬戸内海に日本海の海水を流し込むくらいの大きなことを考えなさい」。その後の数年、部活動と愛玩動物（犬猫と爬虫類を少々）の世話ばかりが充実した毎日でしたが、校長先生の言葉はなぜか繰り返し思い出されました。

高校に入ると前頭前野が発達してきたのか、難しいことを考えたくなり、哲学系の新書や文庫本を読むようになりました。しかし、何が正しいのかも、自分にどこまで分かっているのかも確信が持てませんでした。偉い哲学者達の考えも自分自身の考えも、そしてすべての科学も、結局は脳が創り出しているのだから、脳を科学的に解明できたらすべての答えに辿り着けるのではないかと思うようになりました。「そうだ、脳を研究しよう」。私にとっての瀬戸内海と日本海は哲学・社会科学と自然科学で、それらを結びつけるのが脳研究だと思いました。

ところが時代は1980年代前半、遺伝子工学全盛の時代でしたから、生命科学研究はマイクロな方向に急加速していました。インターネットはもちろん無くて、どの大学のどの学部に進学すれば個体の持つ思考を明らかにす

るような脳研究に関わることができるのかまったく分かりませんでした。ときどき京都大学霊長類研究所（霊長研）でのサル脳研究がテレビで紹介されましたが、大学生が参加しているようには見えませんでした。

それなら、自分で好きにやっちゃえばいいか、と無謀なことを考えて、附属農場に200頭ものウシを飼育している十勝の大学に進学しました。末梢神経の解剖学研究しかできませんでしたが、形態学を知る本当に貴重な経験でした。脳については、さまざまな動物種の脳サンプルを貰って、趣味のように染色して観察するのがせいぜいでしたが、それを許してくださった先生方の寛大さが今となっては身に沁みます。

大学院から霊長研に進み、ようやく思っていた脳研究に着手することができるようになり、理研、Caltechを経て、現在に至ります。

玉川大学脳科学研究所（脳研）が10周年記念シンポジウムを開催した2017年、霊長研は50周年記念式典を開催しましたが、不祥事があったため2022年3月に解体されてしまいました。どちらも分子から細胞、個体、そして社会までの広い分野の研究を結びつける希有な研究所という点が共通しています。脳研には、100年以上続いて欲しいと願っています。